Osaka University Knowledge Archive

Title	変化する日本語教育の風景 ： ポストコロナ時代の言語学習とAI、日本語教員の国家資格化を踏まえて
Author(s)	實平, 雅夫; 今西, 利之; 藤平, 愛美 他
Citation	間谷論集. 2025, 19, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101084
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈座談会報告〉

変化する日本語教育の風景
――ポストコロナ時代の言語学習とAI、日本語教員の国家資格化を踏まえて――

対談者
・實平雅夫（神戸大学 グローバル教育センター 教授）
・今西利之（京都産業大学 外国語学部アジア言語学科 教授）
・藤平愛美（大阪大学 日本語日本文化教育センター 准教授）

司会：野畑理佳（武庫川女子大学 文学部 日本語日本文学科 准教授）

※本文中で話者を示す箇所については敬称略

【ポストコロナ時代の言語教育：オンライン授業】

［野畑］　本日はお集りいただきありがとうございます。それでは早速始めたいと思います。

　ポストコロナ時代を迎えて、これまでコロナ時代に必死でやっていたオンライン授業というのが少しスムーズに展開できるようになってきたと思います。一方で、対面に戻すなど、コロナ時代の前に完全に戻ってしまうような動きもあります。

　現在、対面授業とオンライン授業のバランスというのをどのようにとっていらっしゃるかなど、現状をまずお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

［實平］　神戸大学全体の教務の方針として、ポストコロナの場合は原則として対

面ですが、オンラインを妨げないという形ですね。教室の外から見ているとコロナ前と同じような雰囲気だったりします。ただ、先生方と授業の合間などにいろいろお話をさせていただくと、コロナの時に工夫したことの一つや二つを、現在の授業に取り入れられている先生がほとんどかなという気がします。例えば課題の出し方であるとか、授業の前振りや後振り、いわゆる反転授業のような形で取り入れていらっしゃる先生がほとんどではないかと思います。

［野畑］　オンライン授業を効果的に取り入れられる科目の性質について、どうお考えですか。

［實平］　科目の性質というよりも、結構先生の個性というか、先生の好き嫌いというところもあるのかなという気もします。私もそうですが、例えばコロナの前からオンラインでの授業を取り入れられていた先生は抵抗感なく取り入れていらっしゃいました。ただ、コロナになって初めてこういう形の授業をされるという先生のほうが多かったので、やり方をまず理解していただいて、工夫のシェアをするワークショップを開いたりして、だんだん慣れていただくという形をとりました。思っていたよりは事前に抵抗感なく進めることができていましたね。その中から、自分のご経験として有効であったと思われるものを今も取り入れてされている先生がほとんどではないかという気がします。

［野畑］　途中でそういうワークショップがあって、情報共有ができれば、オンライン授業を続けようという気にもなりますね。

［實平］そうですね。いろんな相談もできますし。非常勤の先生方も普段お忙しく、調べたりするお時間が取れないですよね。だから、それがポストコロナにつながっているという意味で、そういう機会を設けたのは良かったかなという気がします。

［藤平］　うち（※大阪大学日本語日本文化教育センター）もそうですね。大学全体の方針というより、留学生教育機関という性質上、学生たちは海外から日本に来ているので、基本的にはやはり対面授業で行うというところに戻っています。

實平先生がおっしゃったように一見するとコロナ前に戻ったように見えますが、やはりエッセンスは散りばめられていると思っています。例えば、うちのセンターですと、全ての教室にハイブリッド授業ができるよう機材が備え付けてあるのですが、その機材を使って、小教室を２，３部屋つないで疑似的に大教室にしたりしています。連絡事項があるとか、説明会をする時に活用しています。

さらに、オリエンテーションなどはオンラインですることが多くなったと思います。一回一回の授業というよりは、プログラムの学生全体を集めなければいけない時に教室が狭いとか留学生がまだ海外にいるとかいった事情があるので、そのような時にはやはりオンラインが活用されています。

個別の授業事例で言うと、ゲストスピーカーをオンラインで呼びやすくなりました。私の場合は、学生の発表の記録などをビデオで残しておくようになって、後でクラス全員で見たり、私の採点の際の振り返りなどに活用しています。他には、ここまで対応されているかどうかは先生によりますが、学生から「体調不良等でちょっと今日は出席できなさそうなのでオンラインで参加させてください」と言われて対応することもあります。

このようなセンター全体の行事や授業での活用という形で、コロナ禍時代の手法が残っていると思います。

［野畑］ 藤平先生がおっしゃったように、オンラインを通じて一堂に会することができるという点や、遠隔地とつなぐ便利なツールとして今も使われていますよね。今西先生いかがですか。

［今西］ 留学生への日本語教育と大学全体のオンライン授業の取り入れ方というのがずれている部分はありますね。留学生の日本語教育という観点から見たときには、交換留学生など、一年や半年の学生に対する授業に関しては基本的に対面を指向しているんですけれども、正規学生の日本語教育では特段対面であることを指向しているわけではないですね。

大学全体で言うと、実はうちの大学（※京都産業大学）では来年度から14週授業になるんです。他大学では、14週授業にした時に一回の授業時間を105分とかにするという手を使うわけですが、それがうちの場合はできな

い。大学が山の上にあるので、通学にとても時間かかって、学生が帰るのが大変なことになるということが理由です。それで、90分授業で14週にして、残りの一週分をオンデマンド授業でやるんですよ。これによって来年度から授業時間数を確保することが決まったんです。そのオンデマンドでの一回分も、必ずしも一回の授業と限定されているわけではなくて、14回する各授業の後に7分ずつ行うのもありだということになりました。あるいは、7回終わったところでオンデマンド授業を45分やって、残りの7回が終わったところでまた45分のオンデマンド授業というのもありで、これはもう担当教員の裁量に任せますとのことです。履修者全員の出席が担保できるのであれば、別にオンデマンド授業じゃなくてもそれは構わないとは言われていますが、すべての学生を別の曜日・時限に集めるのは不可能なわけですよね。だから、事実上オンデマンド授業が恒常的に行われるような感じになります。

それから、うちの大学では補講期間が設けられていないんですよ。これもあって、例えば教員が何か理由があって登校できなくても、自宅からだったらなんとか授業ができるという状況だったら、オンライン授業にするというのは、恒常的にやっているみたいです。学生が何がしかの事情で出席できない時にも、状況が整うのであれば、いわゆるハイブリッド型授業にするということも、個人の先生方がどれぐらいそれに配慮するかもあるんでしょうけれども、やっているというのが現状です。

ですから、日本語教育という部分で対面重視の考えを色濃く求めるところはそれを指向しているようですし、そうではないところではオンデマンドやオンライン型授業というのが恒常化しつつあるというように捉えています。

［藤平］　90分を14回で分けて、7分でオンデマンド型授業をするのなら、リフレクションシートを書くだけで毎回7分を使う、という授業も成り立つということですか。

［今西］　コロナの時に言われたように、その7分に対して双方向性を担保する必要があります。資料を配布するだけ、何か提出させて終わりというわけにはいかない。

あと、COIL 型教育（※オンラインで海外の大学等との交流をする教育方法）ってありますよね。それが強く推奨されているんです。日本に来ている留学生が COIL で何をやるかという話はまたちょっと違うと思うんですが、留学生以外の学生が海外とオンラインで結んで共同作業するとなると、相手先の第一候補として、やっぱり諸外国の日本語学習者がやりやすいはずなんですよね。日本語教育ということに引きつけていくならば、そういう海外の日本語学習者や日本語教育機関で起こってくる可能性は十分あると思います。

［實平］　私がさっき言った、コロナ前にやっていたというのは、その COIL 型授業でした。リアルタイムでやったので、時間帯が近いオーストラリアかニュージーランドあたりとやっていたんですけどね。特に私学ではそういう COIL 型授業を増やしたいというニーズがあるようです。

［野畑］　ここからは、うまくいった事例と課題になることをお伺いしたいと思います。

今もうすでに、今後対面授業に完全に戻るというよりは、うまくいったことを活用していくという事例が残っているということを伺いましたけれども、藤平先生いかがですか。

［藤平］　うちのセンターの場合は 2020 年度から常に海外配信している科目を一つ開講しています。もともとコロナ前から遠隔配信に取り組んでおり、日本文化関連の授業を海外の協定校に配信しています。ただ、これも先ほど實平先生がおっしゃっていたのと同じで、時差が問題となります。ですから、リアルタイム配信できるところというと、アジア圏とか時差があまりないところに限られてきます。これまでに配信したのは中国とタイですね。いわゆるオムニバス形式で、一人の教員が 90 分ずつ毎回違う内容を授業しているので、協定校側に事前にシラバスをお伝えして、学生の関心にもとづいて選んで見てもらうというような形をとっています。

最初の試行的な段階の頃ですと、特別授業を作って海外に配信していたんですけれど、それをすると教員の負担が大きく長く続かないという懸念がありました。そのため、正規科目にする必要がありました。そうすれば、セン

ターの教育の一部として運用されるようになるからです。うちの留学生も教室でこの科目を受講しており、いろいろな先生が担当される科目なので、日本文化の先生がどんな授業をしているのかを知る機会となっています。いまでは正規科目として位置づけられており、毎学期開講しています。

［野畑］　そうすると、その講義を聞いて興味を持った人たちが本当に留学してくるということもあるんでしょうか。

［藤平］　そうですね。あり得ると思います。そういう狙いも考えています。

［實平］　COIL 型学習なども結局は留学の呼び水みたいな形で、日本に興味を持ってもらって、しかも来るんだったらうちの大学はこんな授業をしています、といった形で、誘因の一つの材料としてやっていた側面もありますよね。もちろん、こちらの学習者にとっては、普段接していない海外の交流協定校の学生との交流授業みたいな形で位置づけていたんです。人気自体はあったと思います。

［今西］　日本語教員養成系の話になるんですけれども、うちの大学の場合は海外での実習があって、滞在期間は二週間なんです。これまでの課題が、現地での授業見学の機会をどう担保するかでした。これがなかなかできなかったんですけれども、大阪大学での授業配信や遠隔授業見学というのを参考にして、タイの現地の大学から授業を配信してもらって、それをこちらで受けて授業見学をするというのを一回やったんです。その後交流もしました。すると、実習を受けている学生がタイに行ったときの教案とか、一回目の授業からの授業の組み立てが、以前とは決定的に違います。実習生にとっては、自分が実習で担当するクラスや学習者の様子が、渡航前にわかる。

それからもう一つ。向こうの学習者の側が、うちの学生が初めて教壇に立ったときに、「あ、映像で見たあの人だよね」という感覚があって、すぐに打ち解けてやり取りができたようで、過去にあった一回目の独特の緊張感みたいなものはかなり軽減されていたんですよね。

お試しでやったんですけれども、教員養成という部分で効果もあるし、向こうの学習者にとっても同年代の学生とやり取りできるし、なかなかいいと思って。継続的にそれができるような形になればいいなと思っているところ

です。

［野畑］　いいですね。教育実習の期間は決まっているから、時間の短縮、効率の良さに結びついていますね。では、オンライン授業の課題についてはいかがでしょうか。

［今西］　設備ですね。あんまり難しいことを考えずにパッとできるような設備をお互いが持っていることが一番必要なことだと思います。うちの大学もコロナの緊急事態の時の施設や設備がそのまま残っているんですが、本当に簡易な設備しかなくて、教員がその場で配線をつないでカメラを設置してとかやらなきゃいけないんですよ。こういうのはオンライン授業のハードルを上げていますよね。一方で、プロ仕様の機材を置かれたとしても、教員側は全然対応できないわけですよ。程よい感じの設備で簡易にできるという環境が整えられるといいと思います。

［藤平］　うちのセンターの場合、コロナ禍でいろんな機材を教室に入れるとき、各教室にレストランの呼び出しボタンのようなものを置いて、トラブルがあれば駆けつけられるようにしました。いくらマニュアルや説明ビデオを作っても、急なトラブルにどうしたらいいのかわからないという大きな問題がありました。また、コロナの真っ最中の時などは、先生も慣れていらっしゃらない中で「いろんな機械の使い方を覚えてください」というのは非現実的ですし、負担も大きすぎます。ですから、「まずは教室の設備を使ってみてください。何かあったら駆けつけますので」ということで、教員と教務補佐員、そして大学院生のティーチングアシスタントなどが控え室に常時二名ほど待機して、ピンポンが鳴るたびに走って解決に行くというようなことをしていました。それを一年ほど続けていったら、先生方が大体のことを把握されるようになりました。そうなってくると、マニュアルだけでもうまく動くようになってきます。人員が常時待機するというのは通常時ではなかなかできないことではありますが、最初の投資として有効だったという気がします。

【言語学習と AI】

［野畑］　次の話題となりますが、これまではレポートなどで剽窃じゃないか、盗用じゃないかいうのをチェックしていたと思うんですが、生成 AI の時代に入ってくると、巧妙なコピペや、学生に課された課題を AI が作り出してしまうという状況になっていると思います。先生方がどんなふうに教育で AI を使われているか、あるいは AI を利用する時に問題だと感じている点等があれば教えていただきたいと思います。

［實平］　レポートを書かせる授業のときにはやはり気にしますよね。課題としてテストの代わりにレポートを出したりするときなど、以前は明らかに AI を使っているなと思えるようなのは大体わかっていたんですけど、最近はやはり技術の進歩でなかなか上手なものを出してくるので。もちろん、こちらもいろんな工夫をしないといけないですね。例えば書かせるだけではなくて、インタビューもやるとか、全て複数の評価の視点を持たないといけないと思います。大変な状況だというふうには最近感じています。

［藤平］　うちのセンター全体の話で言うと、やはり課題となったのがプレイスメントテストですね。授業を取る前に正確に学生のレベルを判定しないと学生が困ることになるので、なるべく正確に判定したいという思いがあります。でも、もしテストで生成 AI が使われてしまうと、こちらの運営の問題だけでなく、適切なレベルの授業が受けられないということで、学生にとって不利益になってしまいます。この点は非常に懸念しています。対策として、プレイスメントの説明文に、自分自身の不利益になる可能性があることを学生に伝え、「日本語能力を正確に測るために、AI 等は使わない」という誓約書を書かせるということにしました。実際にどれぐらい意味があるのかっていう課題はありますが、ひとまずこちらは、そういうスタンスであるということを示すためにも書かせることにしました。

［野畑］　来日してからではなく、目の前にいないところでプレイスメントテストを受けるんですか。

［藤平］　そうですね。プレイスメントテストでは、オンラインで文法と漢字のテストを受けてもらい、作文を提出してもらって、その三点で評価をしていま

す。本センターの場合、渡日前に履修登録を終わらせないとタイミング的に授業開始に間に合わないという事情があります。渡日してから面接する時間がありませんし、全体の学生数を考えると、全員面接をするのも現実的ではありません。それで今の段階ではそのようなやり方をしています。

作文を複数の教員で採点しているんですけれども、先生によってはAIチェッカーなどを使って確認することがあります。学生全員の分の作文を見ていると、全然違う国の、全然経験も違いそうな学生が、なぜか同じ書き出しや論点で書いていることもあります。そういう時に念のためにAIチェッカーにかけたりします。その後どうするかというのは、まだ今後も議論を続けていかないといけないことだとは思います。

［今西］ 私は、それこそAIを使うことを前提にしなきゃいけないでしょうし、逆にうまく使う方法を身につけたもん勝ちだと受け取っています。文字情報だけで言語能力を評価するというのは、かなり無理があるんでしょうね。ですから實平先生がおっしゃっていたように、書かれたものに対する説明を求めるとか、発表させるというようなことも含めての評価にせざるを得ないでしょうね。ただ、発表も、準備されたものを見せたり読み上げたりするだけだったら、生成AIでできちゃいますよね。突発的な質問等の、予期しないものに対してどう反応できるかを測るっていうことにたぶんせざるを得ないでしょう。それはマンパワーでできるのかどうかっていう問題でもあるんですが。

外国語教育という観点で言えば、ドイツ語教育とか中国語教育とかでは、本当に死活問題ですよね。そもそもそういう言語を学びたいと思う学生がいるのか。こんなに生成AIで練習や機械翻訳ができたら、もう必要がなくなるのではみたいな議論になっているわけですよね。そうすると、海外の日本語学科とか、日本語系の大学等々も同じ危機感を持っているんだろうなと思います。

一方で、AIを活用したら、日本での生活ってすごく便利になるみたいですよ。例えば、大学から送られる指示文書。Googleレンズなどを使ってカメラ越しに即時に翻訳してくれるので、何を求められているかすぐわかると

か、情報を受け入れるっていうことが楽になりますね。

あとは、自分が書きたいこと言いたいことを学生が AI を使って前もって調べておけるとか。

そういう AI や自動翻訳の利活用を今回初めて日本語の授業で試してみようと思って、とりあえず、スポーツ留学生の授業で、日本語で少し難しめの長い文章を読ませた後に、自分の理解が合っているかどうか確かめさせるのにスマホの即時翻訳機能を使わせてみました。使い方次第では、学習者の理解度を本人が自己評価するみたいな感じで使えて、おもしろいと思いましたね。

［野畑］　学習者が自分の理解を確認したり、必要なことを理解して言いたいことを準備するというように使ってくれたら、学習の効率を上げたり、自律学習ができていいですね。

ただ、AI を使うことが前提になってくると、コツコツ言語学習をやって発表するとか、きちんと読むとか、そういうことは必要なのかという疑問も感じます。根本的な言語学習の考え方についてはいかがですか。本当に今、目の前で読まないといけないとか、何も使わずに読まないといけないとか、何も参照せずにパッと話さないといけない能力、書かないといけない能力とはどこまで必要なのか、その辺が私も疑問なんです。そういう今ここで何かしなければならないという言語能力をどこまで育てる必要があるのか。その点はいかがですか。

［今西］　AI ツールは使っていけば使っていくほど使うのが面倒くさくなるんですよね。最初はすごく便利な感じがするんですけれども、自分の言語能力がある程度向上してくると使うのが面倒くさくなる。

［藤平］　あと、実は学生の言語能力が高くないと、AI からの回答に対して是非の判断がつかないことも多いんです。以前、中上級レベルの学生とメールの書き方を ChatGPT に投げかけてみるというのをやって、その結果を私と一緒に見たんですけど、学生側がこれでいいと思っても、それが自然な日本語かどうか自分で判断つかなくなっちゃうんですよね。自分の能力を超えた日本語になるので、それで学生はいいと思うんですが、私から見ると「ここは

やっぱり不自然だよね」っていうところがあって、そうなると逆に怖くて使えなくなったようです。

丁寧なメール文を書かなければいけない時に、ChatGPT の力を借りて書いてみても、ChatGPT もそのメールの背景や意図がうまくつかめていないところがあるんです。それで、学生と一緒に見てチェックしていたりすると、学生も「自分ではいいと思ったけど、先生にはまだ添削されてしまう。だったらどこが正しいのかわからなくなってしまいました。結局やっぱり日本人のチューターや先生に見てもらうことにします」と言っていたので、やはり使いこなすにも、判断するだけの言語力が必要だと思います。

［實平］　それから上手に使えるようになる教育も必要かなっていう気はしますよね。今のようなハルシネーション（※ AI が間違った情報や論理の矛盾した情報を作り出してしまう現象のこと）の問題があり、過剰に反応してくることがあるので。

だから、例えばプロンプト（※ユーザーによる指示や質問のこと）ですよね。それが的確に自分が言いたいことを表すような指示ができるかどうか、それで的確に反応してもらえないと全く意味がなくなってくるので、その辺も教育が必要だという気がします。

［野畑］　そもそもプロンプトを正しく入れるとかそういう指導は教師側がするべきなのか、その辺が難しいと思います。AI 自体もどんどん進化していって、教師も使い方について学習する時間もあまりないまま学習者にいろいろ指導しないといけないという現状がありますね。

［實平］　別に ChatGPT だけではなくて、インターネットの検索の仕方でも前から指導していましたから、その辺は共通する部分があるような気がします。結構、かなりの能力を要求すると思うんですよね。

［野畑］　学生に AI の使い方の指導など、注意はされますか。

［今西］　ちゃんと指示をしないとえらいことになるよっていうのをわかってもらうという感じです。例えば、教員養成関連で例文をたくさん作るんですが、生成 AI はそれが得意なんですよ。パッと作るんですよね。だから 10 個でも 20 個でもいくらでもできて楽なんです。ところが、言語形式が求めてい

る用法というか、機能にピタッと合うものだけが出てくるわけじゃないんです。そこを種類分けしていかないと、実際の授業の中で余計に混乱させてしまうことが起こりうるわけです。学生がそのことに気づいてくれればそれでよしという感じですね。「これ、このままやったら、ぐちゃぐちゃになるよ」というようなことを指摘して、日本語学の授業でやるようなことを間接的に学んでもらうみたいなことはあり得ますよね。

［野畑］　AI で生成されたもののおかしさを見抜いたり、きちんと分析して「これは違う」ということがわかる能力を育てていかないといけないんですね。

［今西］「絵カードも作ろう」とやってみたことがあるんですけど、ちゃんとはいかないですよ。

［野畑］　教案も AI で作れるんですか。

［實平］　それは得意ですよ。

［今西］　巷に溢れているいろんなものを組み合わせて作るんでしょうね。

［實平］　我々が一番関係する仕事で言えば、シラバスの作成ですね。これもやっぱりプロンプトを的確に入れれば、結構助けにはなりますけどね。過去のシラバスを参考にされる先生が多いかもしれませんが、新しいのを作ったりするときにも役に立ちます。

［野畑］　授業やカリキュラムの準備や評価に使えば効率化につながりますけれど、AI に頼りすぎて考えない、考えずにどんどん使ってしまって思考力の低下につながるということは懸念されますか。

［今西］　出てきたものに対して、反省的な目でそれを見ずにそのまま出すとか、そのまま何かをやるっていうことを続けている学生は、ちょっと突っ込めばボロが出ますよね。そういう学習者は言語能力だけでなく、ある種の学力がある限界のところで止まっちゃうだろうと思います。

［野畑］　教員としてできることは、AI に頼りすぎていたっていうことに気づくように持っていかないといけないんでしょうか。

［今西］　学習者がどこに到達目標を置いているかですよね。結局は作業を適切に行うことを目的としているのであれば、まあそれはそれでいいでしょうけど。自分で考えるということを志向しているような到達目標だったら、そう

いうわけにいかない。

［藤平］　本当にただの道具なので、その道具としての使い方で学生がいいのであればいいんですけど、結局我々の評価が重要ですよね。結果として形ができていれば良いとするなら、AI でできたものでもいいのかもしれません。でも、学生の伸びということを考えて、他のものと組み合わせて正しく判断して使われているのかというところまで合わせて評価するなら、うまく活用した上で、かつ学生の学びになっているのかということまで見なければならない気はします。

私の授業でも、発表するときに資料に生成 AI を使っただろうと思われるフォーマットで出してきた学生がいましたが、内容についていろいろと質問していくと、十分理解できていないまま発表しているところが見えてしまい、発表がうまくいかないということがありました。「この授業では、うまく資料が作れたかについては評価しません。発表内容のほうで評価しているので」と伝えると、学生は「しまった」というような顔をしていました。

結局は授業の目的と評価にどう合わせて、学生もどう使って我々もどう評価するのかというところを考えなければならないと思います。

［實平］　結局、ChatGPT と私と学生との三角関係みたいなものという気がするんです。学力として身についているかどうかをチェックしていくのが、我々の役目だという気がしますけどね。

［今西］　日本語教育において言語形式の正確さのみを指向している場合、たぶんもう生成 AI は正確なものを出してきますので、そこに評価軸を置いている限り、日本語教育自体が苦しくなっていくでしょうね。

［藤平］　言語形式の正確さを評価するとなると、目の前で書いてもらうか発表してもらうか、従来通りのテストをするということになるのかなと思います。確実に生成 AI が使えないもので評価をするしかない。生成 AI を使う前提がありそうだと思ったら、違う評価軸を持たないといけないと思います。

［野畑］　その辺が教員の工夫のしどころになりますかね。AI を使う場合は、いかにリフレクティブに使っていくかということが大事になるということですよね。

【日本語教員の国家資格化】

［野畑］　三番目の話題は、登録日本語教員の制度についてです。日本語教員の専門性の確保や質の向上という目的で始まった制度ですが、ご所属の機関の状況はいかがですか。

［實平］　登録実践研修機関および登録日本語教員養成機関が昨年発表されて、私の所属大学は認定されました。認定するけれども、こういうことに気をつけてくださいという付帯意見というのが、うちの場合は三つあったんです。

一つ目が、大学院の養成研修であることに鑑みて、幅広い教養と高い課題解決能力を有する日本語教員の養成を期待したいということ。二つ目が、学内のコース担当者の連絡を密にして、学内全体にそういう意識が共有されるようにという点。三つ目が、自分の大学だけではなくて、地域の日本語教育にも資するようにという波及効果。この三つの付帯意見がついていたんです。

神戸大学の場合はそれをやっているのが国際文化学研究科で、実践を担当するのが私がいる旧留学生センター、今のグローバル教育センターという所なんです。まだ実施をするところまで時期が進んでいないので、身近に感じることはないんですけど。うちの教員の中で、その国際文化学研究科の授業を担当している教員がいるので、その先生方はすでにそういうコースの授業を担当されているというような状況です。

［今西］　私の大学も認定してもらえたんですけれども、作るまでにそれなりの苦労はありました。

ただ、やりやすかったのは結局閉じたカリキュラムだったからなんですね。他の学科とか他の学部の授業を合わせて成り立たせていたわけではなくて、ある程度自分の専攻の中の科目内で収めることができた。今まで他学科の授業を借りていたというのもあったんですけれども、閉じないと無理ということで、それを全部やめました。そういう体制を作ることができたら、やれると思うんです。

一方で、今までのうちの日本語教師養成プログラムっていうのは、日本語教師養成とは言いつつも、ガチガチの日本語教師養成っていう感じではなく

て、日本語教師っていうことを入り口にして、例えば多文化共生とか異文化理解とか、あるいは海外渡航してタイやインドネシアや中国に行って海外を経験しよう、というような色合いだったんです。登録日本語教員ということになると、やっぱり求められるものが全然変わってくるので、それを考えると、ある種の広がりというのは狭めざるを得なかったですね。うちの場合、特に地域日本語教室系のことであるとか、日本語指導が必要な児童・生徒等々への対応というのが実は科目上もできていない。それをやる余裕もないというところもあって、非常に狭い範囲での教員養成ということにせざるを得なかったんですが、本当はもうちょっと広い領域があるはずなんですよね。そこをどう担保していくかについて、今後はたぶん求められると思うんです。

教員養成系のプログラムを持っていた大学って、ガチガチの日本語教員養成というよりは、いろんな文化体験や異文化理解みたいなことも含めたところにずれていたはずですし、その状況で登録日本語教員制度の枠組みに入ろうとすると、相当無理があるような気がします。

［藤平］　うちのセンターでは、働いていただく先生方の資格の問題というのが今後出てくるだろうと思っています。

［野畑］　日本語教師を目指すという人たちのことですが、質が高い人が求められて国家資格になるということはいいことではあるんですけれども、出口が遠くなって、厳しいカリキュラムになって、お金もかかるようになって、本当にそれを目指す人が増えるのかというのが私は疑問なんです。その点はいかがですか。

［今西］　微妙なところですね。うちの専攻のことで言うと、最初は日本語教師養成があって、そこに国語教職がついたんです。国語教職のほうが資格としてはある意味いいわけですよね。だから、ここ数年は実は国語教職を目指す学生が結構入学して、プラス日本語教師の資格を目指すというように動いていましたね。それがどういうふうに今後動くのかというのは、なかなかちょっと読みにくい。

ただ、国語教職だとどうしてもやっぱり文学系とか、古典の知識が絶対必

要になってくる。そういうところに興味があまり持てない人で、海外志向の人たちがある程度日本語教育のほうの道を目指してもらうと、あるいは志ある人だったら両方とも取れるということが、やっぱり売りになるはずだと思っています。

高校の教員採用試験だと、例えば一次試験で、自治体によっては大学の日本語教師養成プログラムを修了していたら得点がプラスになることもあるんですよ。それぐらい自治体が日本語指導が必要な児童・生徒の対応ができる教師を優遇し始めているんですよね。合わせ技みたいな感じで、学校教員と登録日本語教員との両方を目指す学生が出てきてくれたらいいなと思っています。

［實平］　私の場合、大学院は人文学研究科のほうを担当してるんです。で、国文学の教育研究分野に属しているんですが、やはりその学生の就職先として多いのは中高の国語の教員なんですよ。そうすると、さっき今西先生がおっしゃったような日本語教育の日本語日本文化教育プログラムというのがあって、そこで所定の単位を取れば修了書を出すという形にしています。それを履歴書に書いて、実際に教員採用試験を受けて合格している人もいます。それがあったから合格したのかどうかまではわかりませんけれども、それを面接の時にアピールしたみたいですね。

そういう形で、これからそういう認定されたものも評価されていくのではないですか。

［野畑］　そのような生かし方があるというのが見えてきたら、もっと制度そのものが認められていくという感じがします。

本日はポストコロナ時代の言語学習、AI と日本語教育の関わり、日本語教員の国家資格化について、日本語教育の大きな時代の変化を捉える大変興味深い鼎談となりました。長いお時間をいただき、ありがとうございました。